



星ひかる氏撮影

## 喜ばせたい思いが力に

咽喉がん<sup>いんこうがん</sup>で療養し、2日に東京都内で復帰会見した指揮者の井上道義。11日、神奈川・鎌倉芸術館でNHK交響楽団とブルックナーの交響曲第9番を奏で、聴衆との再会を果たす。

「相当、大変でした」が第一声。手術はせず、放射線治療を選んだ。のどが焼け、体重も10キロ減った。痛みで水も飲めず、胃ろうを2カ月体験。耳管がふくれ、音もよくきこえない。そばを食べてもセメントのように味気なかった。

「本当にひどい病の時は、音楽を聴く気になんてならないと思い知った。僕よりもっと重症

## 井上道義、咽喉がんから復帰

の患者さんたちを見ながら、生きるって何だろうと考えた」

闘病中は、確執を抱えたまま亡くなった父への贖罪<sup>いらい</sup>の思いを込め、舞台音楽を作曲していたという。大好きな野田秀樹と「フィガロの結婚」をやるという夢にも支えられた。会見場となった劇場の舞台には、音楽監督を務めるオーケストラ・アンサンブル金沢などの楽員がつくれた千羽鶴や、ファンから贈られた励ましのメッセージがずらり。

「会いたいと言ってくれる人たちのためにも、戻らなきゃと思った。誰かを喜ばせたいという気持ちだけが、今も、これからも、僕の生きる力だから」  
(編集委員・吉田純子)